



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゴルギアス『ヘレネ賛』に関する文献学的研究：序文、校訂本文及び注釈〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	大中, 幸乃
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11150号
Issue Date	2013-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54657
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yukino_Ohnaka_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏 名：大 中 幸 乃

審査委員	主査	准教授	戸 田 聡
	副査	教 授	山 田 貞 三
	副査	准教授	近 藤 智 彦

学位論文題名

ゴルギアス『ヘレネ賛』に関する文献学的研究：序文、校訂本文及び注釈

本論文は、古典期ギリシアに多数輩出されたいわゆるソフィストの中で最も有名かつ最も重要な人物の一人であるゴルギアスの著作『ヘレネ賛』の再校訂・日本語訳・注釈を行なうことを目的とした論文である。

最も有名なソフィストの一人とはいいながら、ゴルギアスの名は主にプラトンの対話篇『ゴルギアス』の登場人物として知られており、わずかながら現存する彼自身の著作が修辞技術的・思想史的に見て有する意義や、ゴルギアスという人物自体が当時の文化人に対して多様な影響を及ぼす存在だったことは、その重要性に比してこれまであまり注目を浴びてこなかったと言ってよい。研究上のそのような不足を、ゴルギアス自身の著作の再校訂及び注釈を通じて、修正すること、或いはより正確を期するなら、（自ら修正するとまで言わずとも）そのような修正に寄与することが、本論文の狙いである。

これまでの研究と比較して、本論文の独自の貢献が那邊に存するかがわかりにくいとの指摘が審査当初からあった。この点は、本論文が本文校訂と注釈という、そもそも独自性を打ち出すのが必ずしも容易でない作業を主内容としていることにかかわっており、或る程度やむをえない面があると言えるが、論文中、先行研究の紹介と著者の見解とが截然と区別されずに不分明な形で述べられている箇所も散見された。審査の過程ではその他、本論文の注釈において『ヘレネ賛』の文学的・思想的側面の分析への踏み込みが必ずしも充分でないことや、高度に修辭的な作品である『ヘレネ賛』を日本語に訳出するに当たって文学的・修辭的配慮にやや欠ける面が見られるといったことが指摘され、また著者自身も、本文校訂においてなお部分的に課題が残る結果となったことを自ら論文の中で認めている。

しかしながら、それらを勘案してもなお本論文の意義を2つ挙げることができる。第1は、従来の校訂よりも写本の読みを一層重視した（したがって従来以上に、本文への推測の混入を排除した）校訂が行なわれているという点である。本文の内容に踏み込んだ解釈それ自体でなく、その解釈の前提を成す本文の再構成こそを目的とする古典文献学においては、そもそも推測を可能な限り排除することは原則的に望ましいことであり、この点で著者の判断は極めて首肯しうものだと言える。そして『ヘレネ賛』については、納富信留『ソフィストとは誰か？』所収の邦訳など既に複数の日本語訳が存在するが、それら訳のもととなったギリシア語本文の校訂にまで立ち返った上で、既存の日本語訳の不十分な面を指摘してもいる本論文は、本文の新たな校訂と、それに基づく新たな日本語訳とを提示した点で、独自の貢献をもたらしていると評してよい。

第2に、短編とはいえ西洋古代語で書かれた本文について、本論文におけるように詳細な注釈を施した研究は、少なくともこれまで日本語文献では他にあまり例を見ない。既述のように、注釈という研究の形態は、それ自体としては独自性を打ち出すのが容易でない形態であり、また、本論文の注釈が上述した諸々の先行研究に負っている部分が相当大きいことも明白だが、それらを勘案してもなお、本論文において著者が欧米諸語の諸研究を読み解き注釈をまとめあげることによって示した力量は、相応に評価されるべきである。

以上述べた2点に鑑みて、本論文には研究上相応の意義を認めることができると思料され、審査委員会は全員一致で、本論文に対して博士（文学）の学位を授与するのが相当であるとの結論に達した。